
五月時雨

玲香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

五月時雨

【著者名】

玲香

N7752M

【あらすじ】

彼と彼女が過ごす五月時雨の夜。

想いがすれ違いながらも重なる不器用なふたりの物語。

「よ

「うん」

短い言葉が互いの間を抜ける。

彼は無言で彼女にキスを送る。

彼女の唇もそれに応える。

それが、セフレとしての役目だから。

事が終わると、彼は無言で部屋を出る。

彼が彼女の部屋で発する言葉といえば、最初の「よ」のみだ。それだけで心が弾む私は、きっと心が病んでいるのだらう。

どうして恋人になれなかつたんだらう。

本気で、好きだつたのに。

「好きです

半ば勢いで言つた彼女に、彼は涼しい顔で言い切つた。

「とりあえず、やるだけやろっか

「……え？」

「だつてお前、俺のこと好きなんぢょ？」

「それは……そう、だけど

「じゃあいいじゃん

その場で押し倒されて抵抗できなかつたのは、彼が好きだつたから。やれば、気持ちも受け入れてくれるんぢゃないかな、なんて期待してた。

彼女の初めてを奪つた後、彼は汗の浮いた額を彼女の肩に押し付けた。

「お前、いい身体してるじゃん。気持ちよかつた

「…………ありがと

「明日もお願ひできる?」

明日も。明日も。明日も。

明日が積み重なって、いつしか毎日になっていた。

彼がこんなことするのは私だけだ、と彼女は思つた。
彼にまわりつく女たちのだれより、私が彼のことを知つてゐる。
だからこそ、身体も気持ちも許せるのだ、と。
彼は自分のことを語らなかつた。

饒舌だつたのは最初の頃だけだつた。

セフレ、という言葉を知つたのもその頃だつた。

私は彼のセフレなんだ、と変な自信が持てた。

恋人じゃなくてもいい。

彼は私に火照つた身体をくれるのだから。

何年セフレをやってきただらう。

やり方が少しづつ変わってきたのに、彼女は気づいていた。

何も不自然なことは無い。

何も無い。

筈なのに。

「よ

いつも通り部屋に入ってきた彼の指。
灯りを反射して光るリング。

左手薬指。

結婚指輪。

ふたつの言葉が同時に浮かんで、背筋が寒くなつた。
彼女の肩を抱き寄せる彼の耳に口を寄せる。

「その指輪、なに?」

マニコアルからはずれた台詞は、充分に彼を動搖させたらしかつた。

彼女の唇を甘く塞ぐ、少し震えた唇。

熱い舌同士が絡み合い、吐息がもれる。

押し倒された直後、一瞬の隙が出来た。

「ねえ」

彼女の服に手をかけたまま、彼の動きが止まる。無理矢理目を合わせてから、もう一度。

「その指輪、なに？」

「……どうでもいいだろ」

「結婚指輪？」

「知らねえよ

「答えて」

鋭く睨むと、彼は根負けしたように彼女の上から降りた。乱れた服を片手で直す。

「結婚指輪だよ」

「誰との？」

「関係ないだろ」

「知りたいの」

私はまだ、あなたが好きだから……。

セフレに恋する資格は無いって分かってるけど。この気持ち、隠しておいた方がいいってことも。

「怒らないから教えて

「怒るだろ」

「私がただのセフレだつてことは承知してる。だから

横目で彼女を見つつ、彼は重い口を開く。

「お前と初めてやる前から付き合つてる女と

「そんなんに前から？」

「ほら、怒つてる」

「驚いてるだけ」

そんなんに長く、私は騙されてたんだね。

怒る代わりに、彼女は彼に極上の微笑みを送る。

「おめでとう。お幸せに

「お前……いい女だな」

「今更気づいたの。遅いよ」

私が気づくのも遅すぎたよね。

動かない彼に、彼女は手を振る。

「ばいばい。もう会えないね」

「……サンキュー」

最後に言った彼の言葉がどんな意味を持つかなって、考えたくない。
彼は背を向けてドアの向こうに帰り、一度と振り返らなかつた。

さよなら。

私の好きだった人へ。

ドアを後ろ手に閉めて、大きく息を吐く。

問い合わせられると、思つていた。

殺されるのも覚悟してた。

なのに彼女は、笑つて俺と別れた。

「……ごめんな」

最後まで出なかつた謝罪の言葉が、口からするつといぼれる。
聞こえてないのを祈る。

一目惚れだつた。

ずっと想い続けた。

せめて俺の名前を知つてほしいと、好きでもない女たちと寝てみたりもした。

だから彼女が告白してきたときには、舞い上がつた。

他の女と付き合つてたけど、そんなのどうでもよかつた。

彼女を手に入れたい。

俺を急かす想いが、身体を重ねさせた。

セフレって言われたときには、本当に驚いた。

俺にとつては全然、そんなつもりなかつた。

好きでもない女と付き合つてゐる俺と彼女が釣り合わないと言われる
のが怖かつた。

世間的には彼女のポジションにいる女にプロポーズされたとき。

「一生死ぐすから結婚してください」

そういうのは男が言つんだら、と思つたけど、もう抵抗できなかつ
た。

式の口取りも住居も、すでに用意されていた。

婚姻届まで出されていた。

双方の親たちに従うほか、選択肢が見つからなかつた。

最低だ、俺。
好きでもない女を幸せにして、

一番好きな女を傷つけた。

とめどなくあふれる涙を、五月時雨が静かに洗い流していった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7752m/>

五月時雨

2010年10月15日21時53分発行